

## 「再会」

静岡県在住 長嶋 様（女性）

紅葉の日光に、娘夫婦に誘われたのは、平成十四年十月二十六日の事でした。その折、兼々一度訪れてみたかった、元土浦海軍航空隊に車を走らせてもらいました。

私は、先ずその跡地に建つ「雄翔館」に引き込まれるように入館しました。館内には、戦没者の遺品・遺書が、ギッシリ展示され、あの当時の若者の純粋な愛国心が胸に迫り、一つ一つに思いを巡らせておりました。

と、同道の義妹の「清水出身の人が・・・なんて読むのかしら、カナエかしら。」の声にハッと、忘れていた六十年前の『鼎ちゃん』・・・『鼎ちゃん』のことを思い出しました。

それは、私がお下げ髪の頃でした。太平洋戦争が日に日に厳しさを増し、ラジオから流れる軍艦マーチでいやが上にも戦意が昂揚する頃でした。女学校の友人の近隣に『カナエちゃん』と呼ぶ男子学生がおりました。私は呼び名から、てっきり女性だとばかり思っていました。友人に「カナエってどんな字を書くの」と尋ねると、『鼎』という難しい漢字を教えられました。

その鼎ちゃんが予科練に入隊することになり、友人の家で壮行会が計画されました。私も招待を受け喜んで出席しました。

当時予科練生は、学力体力の優れた若者のみ選ばれ、女学生達の憧れの的でした。一時間ばかり同席しましたが、彼の凛々しい風貌に、私は予科練の制服、制帽、短剣を重ねておりました。一言だけ「お名前は？」と聞かれて、「・・・お元気で！」と答えるのがやっとでした。全員で『若鷲の歌』を歌い彼を送り出しました。彼は「行ってきます。」と敬礼し闇の中に足早に消えて行きましたが、私の彼のシルエツトだけが何時までも残っていました。

彼の戦死の報を聞いたのは敗戦の色が濃くなった頃でした。私の青春時代に彗星のごとくキラッと輝いて、サーッと流れ星になって消えてしまった彼・・・。



い『カナエちゃん』『第八期甲種飛行予科練習

私は遺影の前に走り寄りました。ああ！あのまぎれもな

生、成績優秀につき云々』の賞状と共に、私はシルエツトでしか記憶のない『S鼎』さんの遺影との巡り逢いでした。かすかに微笑みをたたえた遺影には『昭和二十年六月二十一日、沖縄にて戦死』と書かれている。私は滂沱する涙を拭いてもせずその場に立ちすくみました。凛々しかった後姿の彼と、いま、このように対面しようとは。

純粋な祖国愛に燃え、自ら散華して逝った英霊よ、誰のために、何のためにと。同世代を生きてきた女性の一人として、感慨無量の遺影との再会でした。

平成十四年十二月八日

記す。

（この記事は、平成十五年五月発行の機関紙「予科練」に掲載された記事です。）